

令和 8 年度 学力向上全体計画

学校名	墨田区立小梅小学校
校長名	伊藤 康次

1 本校の学力に関する状況

(1) 墨田区学習状況調査結果から

成 果	課 題
・昨年度の目標に掲げていた「理科の全観点における平均正答率が目標値よりも 5 ポイント以上上回るようにする」については、全観点で 5 ポイント以上上回ることができた。 ・第 2 ～ 6 学年までの全 34 観点中全ての観点において、全国平均を上回った。日頃の授業に加え、学力向上タイムや放課後学習、家庭学習での成果と考えられる。	・他学年に比べ、第 5 学年の理科「知識・技能」の正答率が低い。 ・第 4 ～ 6 学年で B 層の割合が多いため、さらなる学力向上のために、B 層を A 層に引き上げる必要がある。

(2) 意識調査結果から

成 果	課 題
・「家族のささえ」は、どの学年も全国を上回っており、家庭状況が良いことが読み取れる。 ・「生活習慣」は、おおむね全国と同程度か、それ以上の結果となった。家庭や学校での生活習慣が身に付いていることが読み取れる。	・中学年が、社会性や学級環境の標準スコアが低い傾向にある。

(3) 墨田区学習状況調査や意識調査以外から明らかになっている学習に関する状況

成 果	課 題
・全国学力・学習状況調査では、国語科、算数科の全ての領域において、全国平均を上回る結果となった。 ・全国学力・学習状況調査の質問紙調査の結果を見ると、タブレット端末の活用に関する質問では、全ての項目において、「よくできる」、「できる」の肯定的な回答が約 8 割を占め、全国平均より高い結果となった。	・全国学力・学習状況調査の国語科では、全ての観点で全国平均を上回っているが、「書くこと」の平均正答率が低い傾向にある。 ・「書くこと」に対して抵抗感を感じていたり、書き方が分からず手が止まってしまったりする児童がいる。

2 本年度の学力向上に関する主な取組

(1) 校内研究でのさらなる指導力向上と授業改善

今年度は、「表現力をつける授業づくり～国語科の書くことを通して～」の研究を進める。普段の児童の姿から、「書くこと」が分からず手が止まってしまうたり、相手や目的を意識して「書くこと」ができなかったりする児童が多いという実態がある。そのため、書く内容を引き出す手立てや、書き方を支える指導、相手意識や目的意識をもたせた活動を取り入れることで、児童の表現する力を高めていく。

(2) 基礎基本の確実な定着

- ①「小梅スタンダード7」で、学習規律の維持徹底を図る。
- ②学力向上タイム（週2～3回）では、国語・算数だけでなく、理科や社会科、情報活用能力に関する内容にも計画的に取り組む。5～6年生においては、「新聞記事を活用した教材」に取り組み、実用的な文章から必要な情報を読み取る機会を増やす。
- ③プリント、小テスト、単元テスト等において、決められた時間内に正確に解く練習を積み重ね、見直しの習慣化を図ることにより、ケアレスミスや無解答を減らす。
- ④理科の学力向上を目指し、ミライシード、問題データベース等で習熟を図るとともに、「指導のポイント」を共通理解し、指導に生かす。
- ⑤各教科の正答率が低く誤答が多い単元・領域は下学年にも伝え、くり返し学習し定着を図る。

(3) 学力向上委員会の組織的な取組

- ・月1回、学力向上委員会を開き、学力向上に向けた取組の確認を行う。
- ・学力向上委員会で墨田区学習状況調査の分析を行い、正答率が低かった単元、分野について共通理解を図り、授業改善に生かす。
- ・D、E層児童の、後期放課後学習教室への参加を促し、C層への引き上げを図る。
- ・9～10月、1～4月の学習ふりかえり期間で、ふりかえりシートやミライシード、問題データベースに重点的に取り組む。
- ・3月、4月に、墨田区学習状況調査、全国学力・学習状況調査の過去問に2回以上取り組む。

3 「令和9年度 墨田区学習状況調査」の目標

- ・各教科B層からA層への引き上げを目指す。A層の児童が5%増加することを目指す。
- ・各教科の記述問題の無解答率を10%以下に減らす。
- ・令和9年度 墨田区学習状況調査では、国語科の全観点における平均正答率が、目標値よりも10ポイント以上上回るようにする。